

厚生科学特別研究費補助金（特別研究事業）

**特定集団から離れた者に対する
保健指導のあり方に関する研究**

平成 1 1 年度研究報告書

平成 1 2 年 3 月

主任研究者 吉川 武彦

特定集団から離れた者に対する保健指導のあり方に関する研究

平成11年度研究報告書

平成12年3月

主任研究者 吉川 武彦（国立精神 神経センター精神保健研究所所長）
分担研究者 西園 昌久（心理社会的精神医学研究所所長/福岡大学名誉教授）
北村 俊則（国立精神 神経センター精神保健研究所社会精神保健部長）
丸山 晋 （淑徳大学社会学部社会福祉学科教授）
伊藤順一郎（国立精神 神経センター精神保健研究所社会復帰相談部長）
吉川 武彦（上記）

目 次

総括研究報告書	1
主任研究者 吉川 武彦	
分担研究報告書	
I 特定集団指導者と信奉者の関係についての精神医学的・精神分析的研究	7
分担研究者 西園 昌久	
II 特定集団指導者と信奉者の関係についての国内外の文献学的研究	15
分担研究者 北村 俊則	
III 特定集団から離れた者に対する保健指導のあり方に関する研究	33
分担研究者 丸山 晋	
IV 特定集団から離れた者に対するケアシステムの構築に関する研究	39
分担研究者 伊藤 順一郎	
V 特定集団から離れた者に対する心のケアに関する研究	49
分担研究者 吉川 武彦	

総括研究報告

厚生科学研究費補助金（特別研究事業）

総括研究報告書

特定集団から離れた者に対する保健指導の在り方に関する研究

研究組織

総括研究者	吉川 武彦	国立精神・神経センター精神保健研究所	所長
分担研究者	西園 昌久	心理社会的精神医学研究所	所長
	北村 俊則	国立精神・神経センター精神保健研究所	部長
	丸山 晋	叔徳大学社会学部	教授
	伊藤順一郎	国立精神・神経センター精神保健研究所	部長
	吉川 武彦	上記	

特定集団からの離脱者の心のケアを行うには、特定集団の指導者のカリスマ性を明らかにするとともにイニシエーションなどによるマインドコントロールの実地に迫る必要がある。脱マインドコントロールはマインドコントロールの過程をさかのぼる形で行うか、さらに離脱者の精神安定と再社会化を図るためには心のケアが必要であることを明らかにした。心のケアには離脱者を支える家族にも広げられるべきであることも明らかにした。現行の地域システムとしては保健所の利用や精神保健福祉センターの活用が期待されるが、特定集団のカルト化を防ぐ意味とその被害者の発生を予防する意味から新たな研究施設の設置を提案した。

A 研究目的

本研究は、特定集団から離れた者に対する保健指導の在り方に関する研究の分担研究として、特定集団から離れたものあるいは離れようとしているものであってなおかつ特定集団の信奉者との関係やその教義等から離れられないものに対するいわゆる脱マインドコントロールと心のケアに関する手かかりを得ることを目的として行ったものである。具体的には、マインドコントロールとは何かという点から考察を行うとともに脱マインドコントロールの手法の検討を行い、さらに脱マインドコントロールに一定の手順があるとすればどのようなもの

であるかを明らかにするほか、具体的なリハビリテーション手法や手順を明らかにすることか目的である。そのほか、リハビリテーション過程でも重要となるであろう心のケアについての考察を深め、特定集団離脱者のみならずその家族の心のケアをどのように行うのか望ましいかを検討することとした。

B 研究方法

主任研究者のもとに5人の分担研究者をおき研究を進めた。分担研究者と分担研究内容は次の通りである。

1. 主任研究者（総括）

古川 武彦（国立精神・神経センター
精神保健研究所所長）

分担研究者

1) 西園 昌久（福岡大学名誉教授、心理
社会的精神医学研究所所長）

特定集団指導者と信奉者の関係につい
ての精神医学的・精神分析的な研究

2) 北村 俊則（国立精神・神経センター
精神保健研究所社会精神保健部長）

特定集団と信奉者の関係についての国
内外の文献的研究

3) 丸山 晋（淑徳大学社会学部社会福
祉学科教授）

特定集団から離れた者の保健指導のあ
り方に関する研究

4) 伊藤順一郎（国立精神・神経センター
精神保健研究所社会復帰相談部長）

特定集団から離れた者に対するケアシ
ステムに関する研究

5) 古川 武彦（同上）

特定集団から離れた者に対する心のケ
アに関する研究

分担する研究内容については十分に打ち
合わせを行いさらに、主任研究者は分担研
究者に対して個別に打ち合わせを行うなど
して機能的に研究を進めた。研究内容や研
究対象から考えても個別的なケース検討を
行う必要かあると考えたか、時間的な制約
もあるので分担研究者がこれまでに行って
きた研究から応用できる知見や経験したカ
ウンセリング内容などを検討して研究を進
めたほか、特定集団から離脱した者の手記
などを十分に参照しなから研究を行った。
さらに、特定集団から離れた元信奉者を援
助してきた者の手記や経験談などを分析す
るほか特定集団離脱者のカウンセリング経
験者からの情報を収集し、さらに国内外の
文献の検討を行って研究を進めた。

C 研究結果

特定集団の教義や特定集団の指導者の信
奉者かその特定集団から離れるには、離脱
しようとするもの自身が変わらなければな
らないことは目明である。しかしなから
離脱しようとするものか教義に疑問を抱い
たり教祖の行動などに疑念をもつにいたっ
ても、即座に特定集団から離脱できるわけ
ではない。なせなら、これまでも特定集団
は収容監禁などの物理的拘束のみならず、
薬物を使用するなどして生理的拘束をする
ほかマインドコントロールといわれる心理
的拘束を行うなどしたり、さらには社会か
ら隔離された地域で生活を営むようにしむ
けるなど社会的拘束を行い、その特定集団
からの離脱できないような状況設定をして
きているからである。

したがって、このような状況にある特定
集団の信奉者を救出するとしても、特定集
団指導者とその信奉者との関係かどのよう
に結ばれているのかということの解明しな
いことには救出のための手かかりも得られ
ない。そこで、この関係が成立する過程に
関する研究を行うとともに関係解体のため
の手かかりを得るために研究を行った。こ
の研究を担当したのは西園昌久である。

西園は精神医学なかも精神分析学に造
詣が深いか、その見地からまず特定集団の
指導者の特性分析を行った。その結果、Ak
imoto H(1997) かい「空想的虚言症」的
特性があることを容認はするものの、「よ
い自分(good self)」と「悪い自分(bad se
lf)」との人格分裂があり、「悪い自分」
は外化させて自己の全能感を確立してい
ったと分析を加えた。この全能感を確立す
る過程にはヨガなどによって身体的コント
ロール訓練が大きく作用していると考えた
ほか、現実の世界の体制を否定することで
自己の立場をイデオロキー化したという。
現実社会における体制否定のイデオロキー

化によって、個人の欲望を巡る葛藤を越えた価値観をもたせることに成功し、反社会的行動を望ましい行動にすることに成功したとも分析を加えた。

さらに西園は、こうした集団指導者の変化がカリスマ性をもつにいたる経過には、カルト集団の信奉者にも問題があると分析を加えている。つまり、指導者の思想的な発展が病理性を高める経過には信奉者の問題があるというのである。カルト集団が帯びた反社会性に気づき集団から早く離脱し得たものは別としても、集団から離れられない人たちやいったん離れてもまた回帰したもののたちには、内心もっているプライドと現実との間に亀裂が生じやすい傾向があると考えられるという。「これが私た(real self)」という体験を他者との関係のなかで確認できなかつたものは自己愛的になりやすく、社会的な成熟が遅れがちとなる。こうなることによって他者との共感性は乏しくなり自己の存在感も乏しくなるが、それを感じると極端な自己鍛錬を求めるようになり自虐的に陥りかちであるという。

特定集団の指導者と信奉者との関係は修行によって強化され、信奉者にとっては自己愛的挫折感や停滞感を解放する指導者としてあがめられ、さらにイニシエーションによって指導者は神格化されマインドコントロールは完成の域に達する。従って、そこからの脱出したものに対して社会復帰の働きかけを行うには、加入の動機の解明や入信後の体験とそれによる人格や価値観の変化、集団における役割などを十分に勘案した診断アセスメントを行う必要があると西園はいつている。

これらの西園の分析の正当性は、文献的研究を担当した北村俊則によっても明らかにされている。北村は、Med Line及びPsych Infoを用いて文献検索を行い、その結果、特定集団における指導者には精神病理性が

高く、また人格的特徴にはカリスマ性、高い支配欲求、攻撃性、権力欲求、反抗心、自己愛的欲求、知的能力及び創造性などがあることを見いたした。さらに病的な万能感や被被害感があり、現実検討能力も著しく低下していることを見いたしている。

また文献的にみても信奉者にもいくつかの特徴があることが明らかになった。信奉者には知的機能に大きな差はみられないか、その心理的特性においては受動性が高く自我同一性の混乱がみられやすいこと、自他の区別が曖昧でいて他者指向性が高く、依存的で心理的には貧困であるという情報が文献上で得られた。また、特定集団指導者の信奉者には対人葛藤が常にみられることや衝動性のコントロールが悪いという特徴もあり、超自我の形成に欠陥があることが伺えるなど、特徴的であることもわかった。

さらに北村は、このような心理的特性を持つものかカルト集団から離脱したとしても、根本的なところでは心理的困難性が解消しているわけではないので、離脱後に体験する社会的疎外感かさらに自我の統制を乱す怖れは強いのではないかと文献学的な考察から推定している。このようなものに対して行うべき治療的介入は、精神療法（サイコセラピー）的介入が至当であり、自立的に機能しない側面における心理的探索や心理的葛藤の解消を図ることか必要であり、単にカルトから離脱することを目的にした心理療法的なアプローチでは人格の成熟を図るまでにはいたらないであろうことも明らかにされた。

分担研究者の丸山 晋は、特定集団から離れた者に対する保健指導のあり方を、これまでの臨床的な経験と保健指導の経験から検討を加えた。これによれば、マインドコントロールそのものが一定の手法と手順に従って行われるものであるだけに、ボランティアによるアプローチでは奏功しない

ことを明かにし、これまでに精神医学や臨床心理学が積み重ねてきた催眠療法、認知行動療法、精神分析療法、内観療法あるいは森田療法などの精神（心理）療法（サイコセラピー）の理論と実践を活用すべきであるとした。これらの治療法は、単に症状の除去を行うものではなく「真の自己」（西園かいう「これか私た」）を発見することを目的にしていることかその理由であるとしている。その点では、北村の考えと一致する。

さらに ハッサンか命名している「救出カウンセリング」の骨子に触れ、サイコセラピーのみならず救出カウンセリングの手法にも学ぶべきところかあるとしている。その手法とは、まず「親密な関係づくり」を行い「目標重視」を掲げて「人格モデル」をつくり、「カルト以前の自分」を想起し、「現実を直視」させ、「情報を提供して思考停止」を解き、「カルトを離れた未来」を描かせ、「マインドコントロールと破壊的カルトの事実」を明確化するとしている。

またリハビリテーションとしては、精神科医師を始め保健福祉関連職種のかを必要とするほか、法律家や宗教家のかも活用してチームアプローチを行う必要があると説いている。さらに、こうした職種問題はかりてなくリハビリテーションには、定住センターの設置や職業の紹介などを重視しなければならぬし、児童の問題を考慮すれば児童相談所のみならず児童リハビリテーションセンターの構想も必要とされるともいっている。いずれにしても、正しい情報の蓄積を始めケースの集積を行い、着実にケーススタディを行うなどするためにも保健所か中核となる地域センターとして各県や指定都市に設置されている精神保健福祉センターか適正に機能する必要かあると述べている。

特定集団からの離脱者の中長期的なケアをとどのような形で行うのかいいかという研究については、伊藤順一郎か分担した。伊藤は、特定集団から離れた者のかかえる問題を、①精神医学的問題、②心理的問題、③福祉的問題、④人権的問題に分け、社会復帰（リハビリテーション）に際して起こりうる諸問題を精神障害者のリハビリテーションに専門的に関わってきた経験から分析を行った。精神医学的問題では、信奉者自身の精神医学的な意味での脆弱性やインセンションに用いられた薬剤の影響について触れており、これらか社会復帰に阻害的に働か危険性かあることを指摘している。

心理的問題としては離脱後に訪れるであろうPTSDとフラッシュバックやフローティングについても触れている。これらは後に吉川武彦か触れる心のケアの重要なテーマになると考えている。また福祉的問題としては、社会生活としての基盤になる家族関係か希薄になっているはかりか知人や友人との関係も希薄になっていることから人間関係の建て直しか必要である。さらに経済活動かまったく停止状態にある元特定集団信奉者だけに、社会経済的な生活の基盤づくりを直ちに行う必要もある。住宅の確保や就労や就学などの社会生活基盤の整備か必要である。この点では丸山の見解に一致する。

現在もっともホットな問題として挙げられている人権問題については、特定集団の再接近と近隣住民とのトラブルの観点から社会復帰の困難性を論じている。さらに再入会の勧誘か頻々と起こることか予想されるので、その防御策についても論じられなければならないと提言されている。またカルト元信奉者ということて偏見や差別のなかに放り出されることも予想されるので、その人権確保か重要であるとも述べている。

このような視点から、特定集団からの離

脱者を支えるためのケアシステムには、脱会者の再社会化のための心理的支援ばかりでなく精神医学的問題への支援が重要であり、就労支援や住居確保になどの生活支援と人権擁護にかかる支援として法的な対処も行う必要に迫られるとしている。そのケアシステムとして、総合的なアプローチかもとめられているので図を作成して提案を行っている（伊藤の分担報告を参照）。このケアシステムを適正に機能させるためにはケアマネジメントがキーワードになることも示している。

特定集団から離れた者に対する心のケアについての研究は、先にも触れたように吉川武彦が分担した。吉川は精神活動を操作的に扱うということをもイントコントロールにとらえ、育児や学校教育にも広い意味でマインドコントロールが行われていると考える立場をとっている。特定集団が信奉者を勧誘していくプロセスをとり、マインドコントロールと洗脳の類似点や相違点を明かにした上で、カルト集団が行うマインドコントロールの本質に迫った。

その結果、マインドコントロールには大きく3段階があることを明かにした。その第1段階である初期段階は「自分で気づかない」ところに特徴があり、第2段階である中期段階では「計画的強化」が行われる。そこにおける第1ステップは「教義学習段階」、第2ステップは「生理的強化段階」、第3ステップは「心理社会的強化段階」であるとした。大きな第3段階は最終段階で、強要されるわけではないが「行動すること」が当然のこととされることになる。このように特定集団では「気づかない」うちに特異性の高いマインドコントロールが行われているので、脱マインドコントロールに当たっては急速的強制的な手法だけではなく、長期的視点で行う心のケアと必要に応じて治療的介入が重要であるという見解

を得た。

なお吉川は、阪神・淡路大震災において行った心のケアの経験から、心のケアかどのようなときに行われるべきか、また行うべき心のケアの内容はどのようなものであるのかということを図にしている（吉川の分担報告を参照）。災害時における心のケアとカルトからのリハビリテーションにおける心のケアにはタイミングや内容に大きな違いがあるものの、個人に特有の心理的な状態については共通のものがあるのでその状態と心のケアの内容や心のケアを提供する者についてはかなりの共通点がみられることも示唆している。

D 結論

マインドコントロールという用語は必ずしも一般用語化しているとは言い難く、また専門用語としてもまた定義つけられて用いられている形跡はない。マインドコントロールを「マインド」「コントロール」と分けると、マインドは「心」や「精神」を意味しコントロールは「統制」「制御」を意味するので、マインドコントロールは「心を統制する」とか「制御された心」という意味を持っている。その意味では、育児でも教育でも、その意味ではここていうマインドコントロールが行われているわけであり、精神科医療においても精神療法はこのマインドコントロールを行うこととして治療をしているということかてきよう。また、宗教体験では「回心」という状態を経験するというか、これもまた宗教指導者による教育によってもたらされたマインドコントロールであるということができる。

しかしながら特定集団におけるマインドコントロールは、集団の指導者の特異的な思考と体験をもとにして行う、一定の手続きをもった精神活動の操作であり、その目的において一般社会においては受容できな

いものであることもあり、その手法においても内容においても危険性が高いことが推定された。したがって、特定集団からの離脱をしやすいように図る必要があるか、離脱をしたとしても離脱者に対する脱マインドコントロールが重要である。また、その脱マインドコントロールにも人権上の配慮が必要であり、さらに特定集団からの離脱者に対する社会的な圧迫か社会復帰を妨げる要因となることも伺われるので、これらに対する配慮を十分に行う必要がある。

現行の地域システムを活用する視点からは、保健所を窓口にして各都道府県や政令指定都市に設置されている精神保健福祉センターを活用することか期待されるが、さらに定住センターなどの設置も考慮される必要がある。さらに人権の配慮を行うために人権相談機関には常にこの種の相談を受け入れる窓口を設置するほか職業斡旋などのシステムも充実する必要がある。さらに、特定集団に関する研究を行わせその指導者と信奉者との関係をさらに探り、また脱マインドコントロールの手法の開発や心のケアに関する手法を開発するためにも、研究施設を設置する必要もある。

精神障害者はもとより知的障害者や身体障害者でもこれまでは市民からの偏見や差別によって社会的隔離が行われてきた歴史が長い。現在では保健福祉活動が積極的に行われるようになったためにこうした社会的隔離から障害者が自由になってきたか、その間に費やされた年月の長さ膨大な経済的費用の高を考えると、これら特定集団

からの離脱者をこのままに放置せず、これまで培ってきた障害者のリハビリテーションの手法を応用しながら、地域社会に再統合するための手を直ちに打つ必要がある。

障害者が施設から地域社会に戻るには地域社会の住民が正しく障害を理解するようにならなければならないだけでなく、地域住民が障害者を受け入れる用意かなければならない。これをそのまま特定集団からの離脱者について当てはめるなら、特定集団の信奉者になせなかったかということ別にするれば、つまりそれはなぜその障害をおうようになったかということ別にするればということであるか、いくらかでも障害を軽くするように訓練的なものか必要であるように、脱マインドコントロールにもまた訓練的なものか必要となろう。

障害者が地域社会に安心して住めるようになるためには地域住民の理解が必要か同時にその受け皿となるような組織や場が必要である。同じように脱マインドコントロールに成功してもその人が仕舞うところや仕事かなければ地域社会に安心して住むことかできない。特定集団からの離脱者にしても、一般社会に戻って生活を営むためには家族かよく受け入れたり、地域社会がしっかりと離脱者を受け止めることかできないければ社会的な再統合は起こりにくい。社会への啓発活動か希求されるのはこのためである。脱マインドコントロールの手法や手段を工夫するだけでなく、さらに総合的な研究を行う必要がある。

分担研究報告

厚生科学研究費補助金(特別研究事業)
分担研究報告書

特定集団指導者と信奉者の関係についての精神医学的・精神分析学的研究

分担研究者 西園 昌久 心理社会的精神医学研究所長／福岡大学名誉教授

研究要旨

特定カルト集団における、いわゆるマインド・コントロールの内容とそれか成り立つ条件を精神医学的、精神分析的立場から明らかにすることを試み、その上で治療的介入の可能性と方向とを模索した。その結果は次の4点に要因される。

1)ある特定集団の指導者の特性

この人物の人格特性は権力意志と法にふれ罰されたことによる怨みが認められ、よい自分と悪い自分との分裂か人格内におこっている。悪い自分は外在化して社会体制のせいにし、自己の全能感を確立していったと考えられる。その全能感を確立する過程にはヨガなどを通しての身体のコントロール訓練から宗教的イデオロキー化かみられる。また、この過程は信奉者たちとの相互関係の中で病的発展をみたと考えられる。

2)信奉者になった人たちの特性

このカルト集団に入信するに至る動機にはいろいろのものかあったであろう。知的にはすくれていても、自己愛的傾向かつよく現実社会の中で適応かわるく、空虚感、孤独感に陥りやすい人たちである。自己存在感の希薄化から逃れるために自虐的鍛練、修行をいとわない人たちである。それが選ばれた人感覚を起こすのであろう。

3)カルト集団とその信奉者との関係

この特定カルト集団の信奉者の入信の多くはヨガ修行から始まっている。その際に体験された自他の区別をこえて全体感体験、いわゆる大洋感情がそれをもたらしてくれた指導者を神格化し、理想化転移を生じる。反社会的イデオロキーも選ばれた人の証としてとり入れられていく。入信から信奉者になっていく過程で、指導者による社会に閉ざされた基準での評価あるいはランクつけといわゆるイニエンションといわれるものや身体的懲罰など行動学的な報酬と罰によって強化か行われた。

4)示唆される治療的介入の可能性と方向

まず、(1)入信の動機、(2)信奉者になっていった過程、(3)指導者との関係(4)カルト集団内での役割、(5)離脱の経過と本人の感情、(6)離脱かもたらす社会生活上の諸問題などか総合的かつ十分にアセスメントされ、それに応じて支援か立案される必要かあろう。なお、支援する際の基本的態度としては、カルト集団への入信を肯定するのではないが、共感的理解かあってはじめて彼らは心を開くであろう。その上で適応性の訓練と事実に基づいてカルト集団を見直す機会を用意すへきてあろう。

A 研究目的

この研究は、いわゆるカルト集団の信者になった者、すなわち、俗にいうマインド・コントロールを受けた人たちがその集団から離れた後に、健全な社会生活に復帰するのを支援するためにどのような精神医学的方策が必要かつ適切かということ提言することを目標としている。本分担研究は研究全体の目的に達するのに、その前提となる、特定集団指導者と信奉者との関係を精神医学、精神分析の立場から明らかにすることを目標としている。

B 研究方法

上記の目的のためには、研究の対象となるカルト集団の指導者とその集団から離脱した人ひとの面接を行うことが必要であるか、それは実際には不可能である。したがって、図書、ならびに新聞あるいはTVなどによる情報、あるいはこれまで部分的にはあるか発表された学術論文を主な資料として研究せざるを得なかった。また、これまで分担研究者が特異な新興宗教に人信した精神障害者の診察を行った際の症例を参考にすることにした。

(倫理面への配慮)

公にされていない特定の個人を対象にしたわけではないので、特に倫理上の配慮に問題を生ずることはないと考えられる。

C 研究結果と考察

この分担研究の目的に達するには、(1) 特定集団指導者の特性、(2) マインド・コントロールが形成される過程にみられる両者の関係、(4) さらには、これらの研究結果から示唆される治療的介入の可能性と方向とか明らかにされねばな

らない。以下にそれら4領域の研究結果と考察について述べる。

(1) ある特定集団の指導者の特性

この人物については、Akimoto H (1997)の研究では、人格障害にもとづく企図性虚言症にあてはまると報告されている。それは概ね妥当と思われるが、問題は、精神医学的には病理性と診断されるある人物の思考や行動がある人びとには良人のこととして取り入れられていく性質を何故もっているかということである。この人物についてはいろいろに報道されているか、ここでは示教哲学者、中村雄二郎(1998)の次の記述を引用する。

”私か教祖Aの<権力意志>をことさらに問題にするのは、彼の半生を見ると、若いときから終始たいへん権力意志が強かったからである。それは、向上心や研究心とも結びつくと同時に、世間に対する怨恨あるいは憎悪と結びついている。まさに、佛教でいう<三毒>つまり、貪欲、憎悪、迷妄の三つと彼は密接な関係にあったのである。三毒のうち、最後の迷妄あるいは邪見を意味する<疑>であるか、これは、教祖Aか教団幹部たちとともに、嘘をつき、ことばを弄び、都合の悪い相手にはひどい悪口を云い、二枚舌を使ったこと、とくに、のちになれば誰の目にも明白かわかることについて、しらをきり続けたことに、もっとも端的に表われている。この指導者は彼の修行道場、のちのいわゆる宗教団体を組織する前にも法にふれるようなことを重ねて世の中をうらむような人生体験をしたといわれるか、精神分析的理解によればよい自分とわるい自分との分裂か人格内におこり、わるい自分は他人や世間あるいは社会体制のせいだと外在化し、自己の全能感を確立していったと考えられる。その全能感を確立過程にはヨカなど

を通して身体のコントロール訓練、原始佛教のその人なりの取り入れがあり、他方、現実世界の体制の否定を通して自己の立場をイデオロギー化していった。そのイデオロギー化の過程について、先に引用した中村は、この特定集団か人びとの大量殺りくに至る彼らの行為の根拠づけに時期的に3つの段階があったことを指摘している。すなわち”(1)まず、自己自身の救済を中心とした<小乗佛教>的信仰から、(2)多くの衆生の救済を中心にした<大乘佛教>的信仰からいけば、(3)絶対的救済を唱して、あからさまに反社会的な悪を肯定する<秘密金剛乗>信仰への移行である。”その結末かハルマケトノ<地球最終戦争>であった。”地球の未来のために、霊的に選ばれたもの、つまり、自分たちが、どうしても生き残らなければならない。そのためには先手を打って大量殺りくを行うことか必要である。殺りくの犠牲になった者たちは、ふつうに解すれば、無意味に命を落とすことになるけれども、実はそうではなくて、彼らの霊的地位を高めてやることになるのである。”この病的発展の過程を先述したAkimotoの云うように空想性虚言症とすることは可能であるが、その病理性は個人の域にととまらなかったところにその病理性の本質がある。つまり、イデオロギー化は、個人の欲望をめぐる葛藤の防衛にととまらず、価値観の変化をきたし、反社会的行動をも当然あるいは望ましいことと判断させうるからである。信者と称される多くの人かはしめは心身の鍛練あるいは安定を求めてこの特定集団に近づいたのてあろうか、イデオロギー化した教団の方針に影響をうけて多額の献金をしたり、あるいは反社会的行動の実行者になったのも指導者のイデオロギー化したカリスマ性に

ある。たた、こうした指導者の特性ないし病理性ははしめから組織たったものであったかとうか疑われる。先に”病的発展”と云う言葉で使ったが、信奉者集団との間の意識的そして無意識的相互関係の中で拡大していったものであろう。それかまた、指導者とその信奉者たちか誤って自己確信を牢固とした理由てもあろう。

(2)カルト集団に加わり信奉者になった人たちの特性

多教のこれらの人たちの間にはこのカルトにかかわる動機や理由、さらには関わり方もまちまちであろうから、このカルト集団の指導者ならびに集団そのものの反社会性が明らかになった後に彼らがカルト集団に対してとる態度にもちかいかあるたろう。このカルト集団ははしめは、ヨガなど心身の鍛練の効用を宣伝することからはしまったといわれる。そのような目的でこの集団に近づき、その段階にととまった人たちは集団から離脱することも比較的容易だったと思われる。現に、いわゆる信者といわれる人の80%にのぼる人びとかすてに離脱しているといわれる。問題はこの集団の指導者と活動との反社会性が明らかになった後も信奉しつづける人、あるいは一旦離脱を決意したにも拘わらず再びこの集団に回帰した人たちがいることである。事件後、このカルト集団の信者たちは20代後半から40才代の人びとか多く、また、高学歴てしかも専門的技術を要する職業の人も少なからず含まれていることか報しられた。知能は決して低くないのに世間知、常識といったことによく日常の対人生活の狭い人たちのように考えられる。内心のプライトと現実の対人場面での適応とに亀裂を生しやすい傾向の持主てあろう。20才代後半になると「これか私た」という

意味での同一性を確立することか課題になる。ところか、内心の栄光に包まれた古い自己像と自負心かつよい人は青年期や若い成人期に九って他者との間で親密な関係にもとつく新しい価値観が求められるようになると適応に困難になり挫折感をおこしやすい、つまり、内心の自己への期待にもかかわらず、現実の対人関係では孤独に陥り空虚感を体験するか、他を見下しあるいは敵視することてその挫折感から自己を守ることになる。2000年1月、あるテレビで、この「あるカルト集団の信奉者の現在」が放映されたか、現在もなおこの集団に留まっている人たちか、「心を許せる人たちと一堂にあつまるとか欲しい」と述べていた、この人たちは、この組織の行った反社会的行為は否定しきれず戸惑っているか、この組織からは離れきれないている。その理由には後に述べる修行、入信の体験とともにこの「所属感欲求の満足」か彼らの空虚感 孤独感を癒したという体験かあると思われる。もともと自己愛て自分の欠点を見つめることのできない人は、それを外在化して他者や社会制度のせいにしてしまう傾向かある。つまり、この人たちはD W Fairbairnのいうノイト要因を持った自己愛性人格の人と云えよう。さらに、30代10代ともなると自己の能力の限界と停滞を感じる世代である、それかまた一般の人には、矢はその人の現実生活に染みと適応性をつける人格成長の機会でもあるのであるか、自己愛的て社会性のとほしい自己の基準て元璧性を求める人は、この避けられない停滞感をうけ入れることかできない。若い世代の人もこれら中年初期の人も自己愛的満足を失うことの悲しみを受け入れきれず、他者への共感性に欠けるところかあるといてよいてあろう。これら

の人か自己愛喪失の不安を救うものとして心身の鍛練に着かれるのは想像できるところである。自己存在感の希薄化を防ぐために自らの身体の限界に挑み、しばしば自虐的鍛練を未めるのである。それか動機を同じくする集団の中てなされるとき自己の企てを正当化する心理の働きも生してくるであろう。それか 閉鎖的特定集団の結合力、つまり集団凝集性をたかめることになろう。

(3) カルト集団とその信奉者との間の関係

カルト集団と信奉者の間の関係を考えてみよう。信奉者は、いわゆる修行の過程で、身体感覚の変化をともなった自己意識の変容感、つまり、自己意識の拡大、高揚、よろこび、向上達成感、勇気など主観的感覚を体験する。それは前に述べた人ひとの自己愛性挫折や停滞感を解放するものである。この感情は、S Freud(1930)によって大洋感情と名つけられたものである。Freud(1927)は、「宗教とは幻想である。子供か経験する奇る辺なさ そこから呼び起こされる父親への憧憬 偉大な力を持った父親によって保護されたいという願望から作りあげられたもの」と考えた。これに対し R RollandかFreudに対して、永遠の感情と呼びたいような独特の感情か宗教の源泉であることを見逃していると書き送ったといわれる。FreudはそのRollandの主張は受け入れなかったか、「大洋感情」と表現されるような感情の存在は認めている。そして、次のようにも述べている。

”「大洋的な」感情かあとになって宗教と関係を持つようになったことは十分考えられる。(中略)ある私の友人の断言によると、ヨカの修行においては外界に背を向けること、注意力を肉体機能だけに集中すること、独特の方法て呼吸すること

などによって、実際に自分の中に新しい感情や普遍感情を呼びさますことかできるそうで、その友人はそれらの感情を、とっくの昔に埋没してしまった原始状態の心理活動への逆行現象だと解釈しており、これらの感情は神秘思考の英知の多くのもののいわば生理学的裏つけたと考えている。”

この大洋感情が存在することとそれが宗教の種類を超えて信仰体験に共通することは今日では多くの人に認められている。この感情が父親との関係に根さすものか、あるいは人に本来、潜在するものかの議論は別として、父親との関係に結びつきやすいものであろう。この特定カルト集団の信奉者の入信も多くはヨガ修行から始まっている。そしてその修行を通してそのような幸福感をもたらしてくれたカルト集団の指導者を理想化し神格化された存在としてありつつけることを期待したものと考えられる。それが先に述べた指導者の特性ないしは病理性の発展をもたらしたものである。もちろん、この指導者と信奉者との関係性ならびにその発展は人によっていろいろであろう。さらにカルト集団のあやまった同一性としてイデオロキーか大きな要因となっている。指導者のイデオロキーは信奉者たちの現代社会に対する不満や批判を救うものとして取り入れられた。先に引用した中村の説によれば、“Aは、佛教を中心にさまざまな宗教から採り入れた知見を巧みに折衷し、駆使することで、根拠つけようとした。すなわち、その立場は、ヒントゥー教のヨガ、原始仏教、チヘント密教の三つを骨格にし、それに中国の神仙道、ヨーロッパの神智学、占星術、ヨハネ黙示録、ノストラダムスの予言書などを取り入れている”という。このような入信から信奉者になっていく過程で

は指導者による社会に閉ざされた基準での評価、あるいはランクつけといわゆるイニエーションといわれるものや身体的懲罰など行動学的に報酬と罰による強化が行われる。こうしてマインド・コントロールといわれるものか、信奉者の中核群にある人に人格的变化として生じる。

いわゆるマインド・コントロールとは、特定の人のか、判断、態度、指示または強制を無批判あるいは迎合的に取り入れて社会的常識から偏りあるいは逸脱して判断し行為し、第三者の常識的、現実的な批判、忠告を聞き入れないばかりか、かえって誤った判断や態度に固執し強化し、それによって特定の人との結び付きを強化しようとする心的態度をいう。あるカルト集団のマインド・コントロールはこのようにしてつくられたものと考えられる。

(4) 示唆される治療介入の可能性と方向

この研究の目的は、いわゆるカルト集団の信奉者になった者、すなわちマインド・コントロールを受けた人達か、その集団から離れた後に、健全な社会生活に復帰するのを支援するために、どのような精神医学的方策か必要かつ適切かを明らかにすることにある。そこで、この分担研究の結果と考察から示唆される治療的介入の可能性と方向とを模索してみよう。

そのためには、(1) カルト集団に加入した動機の内容とその強さ、(2) 入信し、信奉者になっていった過程での客観的、主観的体験とそれによる人格や価値観の変化、(3) 指導者との客観的かつ主観的関係、(4) カルト集団内での役割、(5) 集団離脱の経過とそれに対する本人の感情、(6) 離脱かもたらす社会生活

上の問題などを総合的にしかも十分に診断することが必要であろう。

信奉者の人格的特性について述べたように、この人たちはもともと内心、誇大的自己評価にこだわりながら、それを受け入れない現実を見下し、否認しているのである。人信し、先に述べたテレビの「あるカルト集団信奉者の現在」でも、またこの集団に留まっている信者は、組織の反社会性の事実を否定しきれない心境にありながら、「からたと心に影響を与えた父親のよう」「幸的修行は間違っていなかった」「指示されればそれに従うかも知れない」「人への善意で行われた」また、指導者が収容されている拘置所の近くに行き、その方角に向かってお祈りしているなどの事実が放映された。これは、今なお、このカルト集団に留まっている信者の本質なのであろう。この集団をすでに離脱した人たちは、これら信棒者とは違った決断をした人たちであろうか、両者にかつては共通したところがあったことも確かであろう。それは、指導者を神格化するという(H Kohut, 1971) 精神分析的自己心理学という理想化転移を起こしたという事実である。それは自己愛性人格の人たちの起こしやすい特徴でもある。従って自己心理学の示唆することを参考にすれば、この人たちへの治療的介入は人信の動機についての共感的理解が必要になるであろう。また、説得による改心あるいは考えの修正をはかることは効果かないばかりか、かえって逆効果になりかねない。W Bion(L. G rinberg, 1977) は、思考を2種類に区別し、会話や説得によって修正あるいは変更しうるのをアルファ要素の思考と身体活動や感情とふかく結びついていて会話や説得では影響うけないヘーター要素の思考と名づけている。身体的修行

や意識変容の体験で取り入れられた信念はカリスマ的指導者との理想化転移を通しての一体験と結合して、単なる論説的説得では変更しかたいことが多いであろう。さきにあけたテレビ放映で、信奉者たちか、この集団の反社会的行為による被害者たちとのシンボムで、被害者たちの今日なおも続く体の変調を生々しく語るの聞いて、この集団の行った事実に目をそらすことかできなくなった状況か認められた。このようなことからみても、集団からの離脱者たちか身体感覚をともなって実感するような心理社会的治療介入か必要であろう。先に、共感的理解か必要と述べたか、これはカルト集団への入信を肯定することではない。カルト集団への接近の動機、カルト集団内の活動に関心を示すことである。そのような態度の上ではじめて治療関係かつくられるであろう。

そして、現実社会での適応性の訓練と、ももとの自己実現の困難性への必要かつ適切な支援か可能になるだろう。そのような過程の進展にともなって彼らの心と態度に事実にもとついてカルト集団の見直しか実現することか期待される。

エ 結論

特定集団の指導者も信奉者も社会性の乏しい人格特性をもともと持っていたと推定される。信奉者になった人は、自己の人格上の悩みと、自己愛的、あるいは社会に心を開かない心の働きか増幅しあって、自己修行に傾斜し人信したものである。その間に身体的修行の感覚的愉悅かこの組織へいっそう埋没する原体験となっている。指導者への理想化転移かおこり神格化し、指導者と特定集団の教義を取り入れていった。そのイデオロキー化した教義にはこの集団の

社会への特有な態度があった。社会との関わりに不全感を持っている信奉者にとってそれはある意味で“放い”であったであろう。しかし、その内容はきわめて危険な反社会性を持ったものであった。

特定集団から一旦、離脱した人を社会復帰するには、この人たちの人格的特性に応じた施策が必要である。それはこの人たちの自己愛傾向を考慮に入れたものであらねばならない。そして、特定集団の行った社会的行為の結果についての事実を知る体験をするとともに、一般社会がこの人たちの社会復帰を期待して支援の方策を準備していることを伝えることであろう。

文献

1) Akimoto H (1997) Two cases of pseudologia

phantastica Consideration fromt view point of forensic psychiatry, *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 51,185-195

2) Fairbairn, W R D (1952) 山口泰司(訳)、人格の精神分析、講談社学術文庫、1995

3)Freud S(1927) 浜川祥枝(訳) ある幻想の未来、フロイト著作集3、人文書院、1969

4)Freud S(1930) 浜川祥枝(訳) 文化への不満、フロイト著作集3、人文書院、1969

5)Grinberg L(1977) 高橋哲郎(訳) ヒオン入門、岩崎学術出版、1982

6)Kohut H(1971) 水野信義他(監訳) 自己の分析、みすず書房、1994

7)中村雄二郎(1998) 日本文化における悪と罪、新潮社

特定集団指導者と信奉者の関係についての国内外の文献学的研究

分担研究者 北村 俊則 国立精神・神経センター精神保健研究所社会精神保健部 部長

研究要旨

特定集団指導者がその信奉者を、操作的に扱うことによって両者の関係を強化しようとメカニズムを解明しようとするほか、特定集団から離れた者に対する保健指導および心のケアを行うための技法の開発および受け皿となる地域ケアシステムのあり方に関する研究を行った

本研究では両者の関係成立に関して精神医学・精神分析学的研究を行うことによって、なぜその関係が強化されるのかを解明し、特定集団から離れた者に対する有効な保健指導の技法を開発し、これらの者にとって社会生活が円滑に営めるような地域ケアシステムのあり方に関する研究を行うための、基礎研究として、国内外の分権的考察を行うことによって関係成立の本質を明らかにすることを目的とした

Psychology・Cult をキーワードとして、Med line, Psych Info のデータベースを検索し、それらの文献のレビューを行った その結果特定集団の指導者、信奉者ともに精神、心理的な問題を抱えており、治療的介入が必要、かつ有効であることが示唆された

A 研究目的

国内では、特定集団の指導者、離脱者についての心理・精神医学的な実証的な研究は、以下の研究を除いてほとんどないといっても過言ではない (Akimoto, 1987, Lebra, 1974, Takahashi, 1989) しかし、近年特定集団が引き起こした事件やそれに関する大衆の反応は、大きな社会問題となっており、心理学、精神医学、精神保健学的な研究の必要性が叫ばれている

特定集団の指導者、信奉者への治療技法、保健指導、地域システムの開発に先立ち、基礎的なデータとして、特定集団の指導者か、どのような手段や方法で信奉者を操作するのか、また彼らに何らかの精神疾患、人格の障害が存在するのか、存在するならばどのようなタイプのものかなどについてあらかじめ把握しておく必要がある 同様に信奉者についても、どのような性格特徴のある人が特定集団に所属し、罪を犯しやすいのかなどについても知る必要がある

そこで、特定集団指導者と信奉者らの人格的な特徴、両者の関係性、治療技法などについて、国内外の、主に海外の文献学的な研究を行うこととした

B 研究方法

検索方法

検索キーワードは「カルト(cult)・心理学(psychology)」とし、Med Line と Psych Info にて、検索した 検索キーワードは、後に「ブレインウォッシュ(brain wash)・精神医学(psychiatry)」等を加えたが、検索結果に変化は見られなかった 結果は章末に掲載した。

C 研究結果

特定集団指導者の精神疾患・人格的特徴

指導者は、カリスマ、大賦の才、支配への要求、攻撃性、権力欲求、反抗心、自己愛的欲求、知的能力、創造性などの特徴をもつ 病的な力能感と迫害感を同時に併せ持つ人格の障害がある 肥大した自己愛を満足させるために、永続的な嘘をつき、他者の権利を侵しても何ら良心かたがめることがない 現実検討も困難である 常に信者、弟子を勇気づけ、しばしば賞賛され、中心にいることを必要とする等の特徴が挙げられた

特定集団信奉者の精神疾患 人格的特徴

知能、パーソナリティ、心理状態等から得られたデータからは、彼らの判断能力や法的判断が貧困であるといったことは示唆されなかったしかし受動性、自我同一性の混乱、他者指向性、自他の区別の曖昧さ、依存的な知覚と心理的分化の貧困さといった人格特徴があることが分かった

また対人的葛藤が常に存在し、衝動のコントロールが困難であるため、必死的に超自我（自分の心の中に内在化された社会的規範、倫理意識）に欠陥があることが伺えた 最近の研究では、カルトに入信する前の青年のアイデンティティの状態は、モラトリアムが拡散状態であるということが言われている。そのため彼らにとってカルト集団の明白な答えが魅力的に映るのである カルト集団を離れた被験者たちは、心理的な困難から逃れられてはならず、これらの人々にとって、社会からの疎外、感情的な疎外、統御的な自我の欠如は主要な問題である。

親業における一貫性のなさは、青年の精神的な異常と繋がる傾向がある 様々な問題を持つ青年は一体感、所属感と統制の感覚のえられる何かを探すようになる 好奇心と期待、敵意や怒り、低い自尊心や貧困な自我、力への欲求はカルトに入信するいくつかの動機となる カルトは青年のファンタジーを満足させたり、困難な世界やプレッシャーからの逃避を提供するのである

特定集団の指導者と信奉者の関係

カルトは一時的であっても、信奉者の内的な葛藤に対し安らきを与えるだけでなく、イデオロギ的に飢えた人々に対し慰めとなっている。カルト的な環境では、個人は完全にアイデンティティの形成と自己認識をグループとリーダーに依存するようになる。そしていつしかグループから離れることは、アイデンティティの崩壊と同義となるのである カルトの活動は信奉者に所属感、一体感などを与える また、信奉者は指導者の操作的な社会的圧力を知的に識別し、理解することか不可能な状態になっているために、彼らかこういった不合理さを理解しようとすると、認知的不協和か起こり脆弱性が増加する

カルト集団への入信者は、権威像に対して潜在的な怒りを持っている その怒りは、カルトリーダーには向けられず（抑圧され）、カルト集団の外の社会的な権威像に対し向けられる

その力動によって、カルト集団内部では緊密な一体感が得られている

治療的介入の必要性

カルト信奉者の心理的な機能は、明らかに自我心理的観点から自立的には機能していない こういった側面から、サイコセラピー的な介入か適当であるように思われる 信者は、自我が拡散した状態で漂いはしめ、意識の状態か変化し、具体的に現実的な要求を表現することか困難となる。脱退した信者は、心的過程で経験したことを言葉にするとときに問題を抱えていると報告する

カルト集団の信奉者との治療的な作業は、宗教的信念体系において自立的に機能しない側面の探索や心理的な葛藤からの真の解放や貞実の宗教的可能性を目標としている このアプローチでは、介入のターゲット（患者とのコミュニケーションでの介入的な会話）は、患者の不健康な宗教的な信念や癖を支配する葛藤でかんじからめ心理的ニート、妥協、偽解決となる

カルト集団脱退者のサイコセラピーの目的は単純にカルトからの脱退を成し遂げることではなく、カルトのような現象に、一時的にせよ魅了される認知傾向、自我葛藤、対象関係的欲求を脱退者か取り扱えるようにすることを目的とすることである。この作業を忘れることは、診断や査定に現れた脱退者の自我機能における不満足な対象関係とその他の欠如を示すだけの結果に終わってしまい、その結果、脱退者のカルトに帰属するような傾向やその他の問題あるライフスタイルを軽視することになる。

またカルトを離れてからの社会からの偏見か、カルトを離れることの最も痛ましい側面であるということも脱退信者から報告されている

D 考察

今回の文献研究から、特定集団のリーダーとそこに所属欲求のある信奉者ともに人格的、精神的な障害か存在するということがわかった 従って精神医学、心理学的な治療的介入か必要であり、かつ有効であるということか強く示唆された また、その治療技法においても通常の治療技法に加えて、治療者か特殊な技法の知識を持っていることか望ましく、こういった知識や技法なしでは、脱退者の治療か成功することか困難であると言うこともあわせて示唆された